

応答可能性を引き出す身振り

塩崎紀子

(早稲田大学)

初中級から中級前期段階は依然として学習事項の積み上げ段階にあると考えられて、構文と表現を中心にした教科書を用いた授業と教育方法が一般的であるかと思う。運用面にしても場面や話題を特定して、こういうときにはこう言う式のモデル会話から或いはモデル会話を習うという方法が多いのではないだろうか。もちろん、現在でもそれらの有効性は広く認められているが、その限界も指摘されている。学習者は、教科書に載っているモデルとしての日本語の習得を目指すように動機付けられるからである。こうした学習者は、実際の日本語使用場面における文脈的意味の理解やインターアクションの流れを捉えることが難しく、加えて言語知識への偏りが強いいため意味をまとまりとして感知しにくいという側面がある。また一方で、アニメに代表されるサブカルチャーへの関心の高まりとそれらへの接近方法の変革、メールやネットサイトを使った日本語話者との直接接触の増加などに伴って、楽しみを得るための媒介として日本語を習い覚え、その自然な延長として日本語を学ぼうとする学習者が現れ始めた。このような学習者は文脈的意味取りやインターアクティブな流れの理解よりも、整合性や正確さおよび語彙の習得といった言語面での知識の獲得を求める傾向がある。しかし、こうした学習者に適当な中級教科書が見つけないのが実情である。教科書と彼らとの社会文化的スキーマが違いすぎるからだ。

以上のような背景を踏まえて、ひとつの試みとして行った早稲田大学 2007 年度春学期の「映像で学ぶ 3-4(初中級・中級前期段階)」の実践報告をする。教科書は用いず、ドラマの映像生教材を主テキストに、言語知識面ではフォーカスオンフォームを適宜応用しながらの、コンテキスト重視の授業である。大学の日本語話者学生の参加を得て、モデルを示さない口頭表現活動を試みることもできたので、合わせて報告したいと思う。